「平和のために私に何が」

沖縄で高校生「平和を学ぶ集い」

戦後70年の夏。過去を学び、現代を見つめ、未来を考えようと、宗派は8月4日から3日間、沖縄県那覇市で「全国高校生『平和を学ぶ集い』in沖縄～命(ぬち)どぅ宝」を開いた。仏教を通して「人間の愚かさ」や「命の尊さ」を体感し、本当に大切なことは何かを、仲間と交流しながら考えてもらいたいと「子ども・若者ご縁づくり推進室」が企画。18教区（沖縄特区含む）と宗門校の5高校から参加した生徒70人と引率者が、現地学習や講義を通して学びを深め、最終日には「平和であり続けるための、僕たち高校生の宣言」（全文別掲）を掲げた。

●仏教の「非暴力」

初日の基本学習で、宗門校・相愛大の釈徹宗教授は、仏教の姿勢を「徹底的な非暴力」と紹介し、「大切な人を守るために非暴力を貫けない場合があるかもしれない。私たちは非暴力を願いながら、他者を傷つけてしまう悲しみを抱えて人生を歩んでいる」。その上で、「世の中は一瞬一瞬の連鎖で出来ていると説くのが仏教。どう考え、どんな言葉を使い、いかに行動するか。この一瞬をどう生きるかで悲しみの連鎖を安らぎの連鎖に変えていくこともできる」と話し、「非暴力」を目指して普段から心と体の感覚を養ってほしいと語りかけた。

●ガマの闇に入る

2日目はフィールドワーク。沖縄戦の記憶を語り継ぐ平和祈念公園や戦火に遭った首里城、激戦の傷跡を生々しく残す糸数(いとかず)アブチラガマで体験学習に臨んだ（写真）。

特に生徒たちの心を強く揺さぶったのが「ガマ」。沖縄に千カ所余りあるという自然の洞窟・ガマ。戦時中、多くの軍民が避難し、米軍の攻撃や集団自決で多くの命が失われた。

真っ暗なアブチラガマの中を降り、懐中電灯の明かりだけが灯る中、語り部の當山菊子さん(61)が「私の義母もこのガマの生き残りなんです」と語り始めた。

昭和20年5月、このガマは南風原(はえばる)陸軍病院分室となり、負傷兵600人を収容。軍医らと共に、ひめゆり学徒隊の少女16人も配属された。「兵士に飲ませるために井戸水を汲み、排せつ物の運搬や切断した手足を捨てるのも彼女たちの仕事だった。あなた方は当時の彼女たちと同年代。感じてください」。

ガマの一番奥に進むと明かりが消され、闇の中から當山さんの声が聞こえる。

「重症患者はここで自決のための青酸カリを渡されました。故郷を思い、母の名を呼びながら、こんな場所で命を終えていった彼らはどんなに悔しかったか」

8月に投降し、生きてガマを出たのは住民40数人、日本兵は7人だった。「その一人が義母。自分が生き延びたことを詫び、苦しみ続けていた。生き残ったから助かったのではなく、生きてもなお苦しみ続ける。人間の心を失うのが戦争。戦争とは人殺しなんです」と結んだ。高校生たちはただただ沈黙していた。

●意見交わす高校生

その日の夜、班別での討議で多くの生徒が、「恐ろしさに足がすくんだ」「命の足跡に触れた」と感想を寄せていた。

そして、最終日の班別発表。オーストラリアの留学生ディレイニー・グレイさん（神戸龍谷高3年）は、母国と日本が交戦した歴史や、沖縄で多くの民間人が犠牲になった事実を初めて知り、涙したことを発表。「寂しい歴史。若い世代にバトンを受け取ってという、語り部の方の言葉が重く響いた」。また、ある生徒が「海のきれいな南国の観光地としか知らなかった」と恥じたが、沖縄の生徒は「県外から来た友達に沖縄戦を知ってもらえた。伝えることが私たちの役目と実感した」と出会いの意義を語った。

沖縄の知念ゆかりさん（高3）がこう発言した。「私の好きな沖縄の歌に『憎むより愛せ』とあるけど、この集いを通して、ありのままを見守ってくれるアミダさまの言葉みたいに聞こえてきた」。若者にみ教えに触れてもらいたい、お寺で出会った仲間と共に歩んでほしいと開かれたご縁づくりの集い。ご縁から育まれた気付きが、そこにあった。

平和であり続けるための僕たち高校生の宣言

全国高校生「平和を学ぶ集い」in沖縄～命どぅ宝～に、仏さまのご縁により集まった僕たち高校生は、沖縄に来て仏さまの話と戦争のことを学びました。

仏さまの話を聞き、争いのすべては「自分さえ良ければいい」という「僕たち自身の心」が引き起こしてしまうものだということに気が付きました。

また、70年前の戦争で生きていたくても、生きていくことができなかった多くの人がおられること、そして、今も戦争によって苦しんでいる人が多くあられることを知りました。

しかし、戦争の傷跡を訪ねている時に、「戦争をおこすのは人間。だけど戦争することを許さない努力ができるのも人間」という言葉にも出会いました。

僕たちはみな、いま生きています。これからも、一緒に生きていきたいです。

そのために何をすればいいのか、何ができるのかを、今回の集いで、全員で一生懸命考えました。

それは僕たちが、この地球の上にいる全ての生命は、みんなつながりあって生きているのだという教えを忘れずに、傷つけあうことも、殺しあうこともない世界にしていく努力をすることが、大切だということでした。

そうすることが70年前に、生きたくても生きることができなかった多くの人々や、今も戦争によって苦しんでいる多くの人々とのつながりのなかで今を生きている、僕たちみんなができることだということを、まわりの友達や多くの人たちに伝えていくことをここに宣言します。

2015年8月6日

全国高校生「平和を学ぶ集い」参加者一同